

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520679

研究課題名(和文) 自然観の歴史的多様性と変容に関する研究

研究課題名(英文) Research on the Historical Diversity and Changes in Appearance on Perspectives of Nature

研究代表者

春田 直紀 (HARUTA, Naoki)

熊本大学・教育学部・准教授

研究者番号：80295112

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、まず環境認識の語彙に関するデータベースを作成し、中世と近世の語彙を比較することで自然観の変容について見通しを立てた。また、住民が日常用いる地名からミクロな環境認識も確認した。動植物観に関しては、動植物が擬人化されるようになった15世紀に注目し、その背景となった動植物利用の変化を跡づけた。さらに、近世末期の農事記録を素材に、自然災害に対する認識とそれに基づく生業戦略のあり方を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this research, first a database was built for vocabulary on the environmental knowledge, then an outlook was formed on the changes in appearance for perspectives on nature by comparing the vocabulary used in the middle-ages and recent era. Additionally, from place names that those inhabitants' used daily, small scale knowledge of the environment was also validated. In regards to a perspective on plants and animals, focusing on the 15th century when the personification of plants and animals came about, the changes in plant and animal usage that formed the background were traced. Furthermore, using data from agricultural records at the end of the recent era it was determined that there was an awareness of natural disasters and a concept of subsistence strategy based on that awareness.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：自然観 環境認識語彙 動植物観 災害観

1. 研究開始当初の背景

現在、歴史学の一つの潮流としてみとめられる環境史は、自然科学との学問交流を通して急速に進展した。ただし、この潮流が歴史的事象の単なる背景として自然科学の成果を吸収するレベルにとどまるならば、環境決定論の誹りを免れることはできないであろう。学際的研究にとって最も必要な手続きは、異分野間の目的と方法の相違を認識した上での対話にあると考える。その意味で、「文献を残した時代の人々が地形環境をどう評価したかは自然科学的な解析からは評価できない。人々が当時の生活様式の中でどのように感じ、どういう風にその土地を評価していたのかという問題は人文科学の方が得意とする重要な問題となる」と指摘した環境考古学者高橋学氏の発言は示唆深い(『新しい歴史学のために』259、2005年)。

高橋氏が人文科学の役割として掲げた主題は、過去の人々が四圍の自然をどのようなものとみなしてきたか、つまり「自然観」の解明にほかならないが、人文系のなかでも内在化された自然について強い関心を払ってきた人類学・民俗学・地理学などに比べ、歴史学における「自然観」研究の蓄積はまだまだ薄いと言わざるを得ない。人類学をはじめとする現在学は、自然に関わる文化的実践の通底にある自然観の「地域的多様性」を具体的に明らかにしてきた(松井健編『自然観の人類学』ほか)。本研究では、自然観の「歴史的多様性」の解明を歴史学固有の課題に掲げ、各時代における自然観の特色とその変容過程について検討を進めた。

2. 研究の目的

本研究では、以下の三方向から研究課題に取り組む。

(1) 環境認識語彙の時代間比較：時代による自然観の相違は自然の呼称に端的にあらわれている。本研究ではまず、環境認識を言語化した中世の語彙とそれに対応する近世の

語彙とを比較し、語義・構成の違いから環境認識のマクロな変化について読み解く。さらに、環境認識語彙のミクロ分析をするフィールドを設定して現地調査を実施し、住民の自然認識のあり方も明らかにする。

(2) 動植物観と環境文化：人間の自然観の特徴は動植物観にもあらわれる。15世紀になると動植物を擬人化する営為がみられるようになるが、そこには、「社会変動による人と動物との懸隔、乖離の溝を埋めるために、擬人化された「物語」による回復がもめられた」という背景の存在が指摘されている(小峯和明「お伽草子異類物の形成と環境」)。ただし、人と動植物(自然界)との回路、それによって構築された環境文化の全体像はまだ示されていない。本研究では、動植物個々に付与された性格を明らかにしたうえで、そうした性格付けがなされる動植物利用の実態をみることで、上記の課題に迫っていききたい。

(3) 災害観と生業戦略：人間の自然観の特徴は災害観にもあらわれる。本研究では災害認識が人びとの自然に対する関係行為にどのような作用を及ぼしたのかという問題を、災害リスクを前提とした生業戦略に注目することで明らかにしていく。また、この作業を通して検討対象となる時代固有の自然観の特質も浮かび上がってくることになる。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、以下の4つの研究方法を立てることとする。

(1) データベースの作成と活用：環境認識語彙のマクロ分析においては分析対象となる語彙のデータベースを作成する。完成後はデータの内容分析を行い、各時代の語義と構成を明らかにしたうえで、その時代間の相違から環境認識の変化について跡づけていく。

(2) 動植物観の関係資料収集と分析：動植物観の表象を示す物語・絵画・造型などの資料を収集し、動植物個々に付与された性格を分

析する。次に、そうした性格付けがなされる動植物利用の実態を古文書・古記録・故実書・料理書などの記事を手がかりに探ったうえで、最終的には人と動植物との関係から生成された環境文化の全体像に迫っていく。

(3) 農事記録の分析による災害観の析出：農耕と災害との関係を詳細に観察記録した近世の農事記録を分析することで、当該期における農民の災害認識を明らかにし、その認識を前提とした生業戦略について考察する。

(4) 現地調査：環境認識語彙のミクロ分析をするフィールドを設定して、現地調査を実施する。調査方法は、対象地域の歴史・地理・民俗文献の収集と分析、現地住民への聞き取りと現場踏査が主となる。また、近世の農事記録に描かれた現地においても同様の調査を実施し、記録から読み取れる災害観に対する理解を深めていきたい。

4. 研究成果

(1) 環境認識語彙データベースを活用した研究成果：環境認識語彙のマクロ分析については、研究補助員の協力を得て、『南北朝遺文 九州編』から小地名の語彙を 3728 件検出し、データベースを作成した。このデータベースの分析としては、環境認識を示す基準語彙を選定し、その基準語彙と結びつきやすい基本複合語・形容語に注目することで環境認識の基本パターンを抽出する作業を行った。小地名を素材としたため基準語彙は田・畠・屋敷・園・林・山・原・谷・川・道など地目中心の選定となったが、南北朝時代の九州地方という条件の下での環境認識の型の傾向性は把握することができた。

同様の作業と分析は近世の小地名を素材にしても行った。すなわち、肥後国菊池郡の下名寄帳より下名(公称の小地名)1428 件を検出し、この地名語彙を構成する形態素の共起関係から環境認識を析出した(春田直紀・亀山大輔「近世地名の可視化分析」『菊池川流域の景観史研究』)。さらに、両データベ

ースの分析結果をもとに、中世と近世との時代間比較も試みた結果、中世固有の制度・社会に関する語彙の形骸化、空間所有の世俗化、屋敷空間の縮小、開発者地名の登場などが看取されたが、比較基準の置き方などに課題を残した。継続して検討を進めていきたい。

(2) 動植物観と環境文化に関する研究成果：15 世紀になると動植物を擬人化する営為がみられるようになるが、その背景には環境変化による二次的自然文化の形成が想定される。新たな動植物観については近年研究の進展が著しい『十二類絵巻』などの絵画資料を素材に考察するとともに、擬人化にみられる自然観が登場する背景となった動植物利用(生業)の実態については水棲生物(魚介類・海藻類)を中心に跡づけた(「中世海村の生業暦」、「魚介類記事から見えてくる世界」)。

(3) 災害観と生業戦略に関する研究成果：論文「クreek農村の自然災害と生業戦略」では、近世末期の農事記録である『野口家日記』を素材に、自然災害の問題を農業生産者の視点から照らし出し、その災害観にもとづく生業戦略の立て方(減災・防災による農業生産力水準の維持)を明らかにした。

(4) 現地調査にもとづく研究成果：『野口家日記』に記録された現地の佐賀県神埼市千代田町では 2010 年度に現地調査も実施し、成果報告書として『クreek農村の環境利用とムラの営み』を発刊した。本報告書では、住民の自然認識のあり方を、クreekを利用した農業の営みや自然災害への対処法から解明している。また、現地調査の成果により、クreek農村における近世末と現在との災害観・自然観の変化についても確認することができた。

環境認識語彙のミクロ分析に関する現地調査は、2009 年度に熊本県菊池市下赤星地区、2011 年度に熊本県阿蘇郡小国町大字上田、2012 年度に熊本県阿蘇郡南阿蘇村大字長

野、2013年度に熊本県阿蘇市大字黒川で実施し、3冊の成果報告書を刊行して（『井手のある風景を支えるムラの営み』、『筑後川源流域の文化的景観を支えるムラの営み』、『阿蘇山中央火口丘群西麓のムラ社会』）研究成果に反映させた。調査内容は、小字地名に関する土地情報と通称地名の収集、林野・耕地の利用変遷についての住民への聞き取りなどで、これらの調査で集積した地名の環境語彙分析により、よりミクロな環境認識のあり方を浮き彫りにすることができた。

(5) 研究成果の社会還元：本研究の成果は専門分野の学術雑誌に投稿するとともに、一般公開のシンポジウムや学術図書で公表することにより、社会一般への研究成果の還元もはかった。また、現地調査の地元協力者を対象にした成果報告書の配付と報告会も毎年実施し、調査地への研究成果の還元を努めた。

(6) 今後の展望：本研究で掲げた研究テーマのうち特に動植物観と環境文化については、共同研究者として参加する滋賀県立琵琶湖博物館の総合研究「前近代を中心とした琵琶湖周辺地域における自然および自然観の通時的変遷に関する研究」で継続して研究を進めていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

春田直紀、クレーク農村の自然災害と生業戦略 『野口家日記』(1847-65)を素材に、日本史研究、査読有、597、2012、pp.52-79

春田直紀、中世海村の生業暦、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有、157、2010、pp.51-82

春田直紀、魚介類記事から見える世界、琵琶湖博物館研究調査報告、査読無、25、2010、pp.73-81

〔学会発表〕(計2件)

春田直紀、阿蘇の景観を支える多層的共同体の歴史、シンポジウム阿蘇カルデラの地域社会と宗教、2013年12月8日、国

立阿蘇青少年交流の家(阿蘇市)
長谷義隆、宮縁育夫、佐々木尚子、春田直紀、橘昌信、湯本貴和、阿蘇カルデラ北部域最終氷期以降の自然環境変遷と人々の生活空間、第24回日本植生史学会大会、2009年11月7日、熊本大学(熊本市)

〔図書〕(計9件)

春田直紀監修、熊本大学教育学部、阿蘇山中央火口丘群西麓のムラ社会 熊本県阿蘇郡南阿蘇村大字長野の現地調査、2014、117

吉村豊雄・春田直紀編、清文堂出版、阿蘇カルデラの地域社会と宗教、2013、420
春田直紀監修、熊本大学教育学部、菊池川源流域の文化的景観を支えるムラの営み 熊本県阿蘇郡小国町大字上田の現地調査、2013、119

春田直紀監修、熊本大学教育学部、クレーク農村の環境利用とムラの営み 佐賀県神崎市千代田町大字渡瀬・柳島の現地調査、2012、108

春田直紀監修、熊本大学教育学部、井手のある風景を支えるムラの営み 熊本県菊池市下赤星地区の現地調査、2011、91

春田直紀編、総合地球環境学研究所N E O M A P 北部九州W G、菊池川流域の景観史研究、2011、280

春田直紀(共著)、昭和堂、景観の大変容 新石器化と現代化、2011、pp.120-147

春田直紀(共著)、文一総合出版、野と原の環境史、2011、pp.229-250

春田直紀監修、熊本大学教育学部、阿蘇北外輪山麓のムラ社会と生活環境 熊本県阿蘇市大字小倉地区の現地調査、2010、94

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

春田 直紀 (HARUTA, Naoki)
熊本大学・教育学部・准教授
研究者番号：80295112

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：